

# ため池みらいプロジェクト

柴崎浩平（環境デザイン系）

キーワード：農村，ため池，草刈り，里山，山採り，コミュニティビジネス

## 1. はじめに

本プロジェクトでは、ため池のある暮らしのみらいを創造していくことを目的とし、水や緑に関する資源（ため池や里山，農業・農地，それらを管理する人材など）の管理・活用に向けた地域連携のあり方を探求している。連携先としては、著者が代表理事を務める「（一社）ため池みらい研究所」ならびに同研究所に関わるプレイヤーとなる<sup>注1</sup>。

活動内容として大きくは、「研究・実践活動」と「交流活動」をおこなっている。「研究・実践活動」としては、「暮らしとつながる里山づくり」と「草刈りグループの創造」がある。「交流活動」としては、フィールドに赴き、地域のイベントへの参加やフィールドワーク、学内の交流活動などがある。以下、順番に説明を加えていく。

なお、2023年度のプロジェクトメンバーは2回生7名，1回生11名の計18名である。

## 2. 研究・実践活動

### 2.1 暮らしとつながる里山づくり

#### 2.1.1 背景と目的

かつて里山は農村でのライフスタイルに欠かせないものであった。しかし今日の暮らしにおいて、里山は利用されなくなり、結果として多くの里山は荒廃している。そこで、里山資源を現代のライフスタイルにあった形で活用し、里山の荒廃を防ぐ取り組みを展開している。

具体的には、山採り（里山に自生している樹木・幼木・下草を掘り取り、庭などの植栽として活用すること）を促す仕組みづくりをおこなっている。連携先は、リビングソイル研究所（代表 西山氏）および加古川市志方町広尾東の住民である。西山氏は、土壌の専門家であり、自生種を生かした植栽空間づくりをおこなっており、学生への技術的な指導を担っている。広尾東の住民は、実践フィールドの提供を担っている。

#### 2.1.2 活動の内容と今後の課題



写真1 山採りの様子

主な活動としては、里山での樹木・幼木・下草の山採りおよびそれらの試験的な販売、里山の植物の種の採取・育苗、山採り植物を活用したワークショップの開催、山採り植物を植栽した事例の視察および庭づくりに向けた計画策定などをおこなった(写真1)。

本プロジェクトの大きな課題は、山採りコミュニティの創造にある。里山には様々な植物が自生しているが、全ての植物が山採り・植栽に適している訳ではない。活着のしづらさや販売価格は樹種によって様々である。また、同じ樹種であっても、大きさや形で販売価格も異なる。そのため、山採りに適した植物を見分け、その掘り出し方・活着のさせ方や販売に関する知識・技術を習得する必要がある。活動を始めた当初は、樹種の見極めや、掘る・植えるといった作業もままならなかったが、本年度では学生だけでもある程度は実施できるようになるなど、活動が進捗している。

今後は、山採りのスキルを磨くとともに、山採り植物の販売実績を蓄積していきたい。また、山採り植物を実際に植栽し、庭づくりのスキルも蓄積していきたい。

### 2.2 草刈りグループの創造

#### 2.2.1 背景と目的

草刈りは、農村の資源を管理していくうえでの基礎的かつ必要不可欠な作業である。草刈りの実施主



写真2 播磨畦師の活動の様子



写真3 「草刈りフェス 2023@加古川市」の様子

体は、畦やため池の堤体、共有地などの実施場所によって異なるが、集落コミュニティで実施されるケースが多い。しかし、少子高齢化や集落機能の低下にともない、地域の草刈を継続して実施していくことが困難になっている。そこで、多様な立場の人々が参加する新しい草刈りグループが複数生まれやすい仕組みづくりをおこなっている。

### 2.2.2 活動の内容と今後の課題

これまでに、都市部の住民が有償で草刈りサービスを提供するグループ（名称：播磨畦師（ハリマアゼシ））の創造などに取り組んできた<sup>注2)</sup>。今年度は、播磨畦師の活動に学生が参加し、草刈りをおこなった（写真2）。

また、草刈りに関心を抱く人材を増やすために「草刈りフェス（写真3）」を開催した（11月3日、加古川市にて）。実施内容としては、草刈りの綺麗さや安全面、生き物への優しさなどの評価ポイントを設定し、3チームに分かれて競技形式にておこなった。また、「株式会社マキタ」による草刈り機の展示や、「加古川カヌー倶楽部」によるため池カヌー体験、「吉良農園（丹波篠山市）」の黒枝豆の販売、播磨畦師のメンバーや学生による飲食物の販売や生き物教室の実施などをおこなった。これらの企画・実施に向けては、播磨畦師のメンバーや学生で構成される実行委員でおこなった。当日は100名以上の来場者がみられ、遠くは東京からの参加者も見られた。「草刈り」は様々な立場の人々が交流し、



写真4 草刈り・かいぼりへの参加時の様子

気づきが得られるコンテンツであることが再確認された。

今後も、単に草を刈るだけでなく、草かりを通した学びや気づきが得られる仕組みづくりを実施していく予定である。

### 3. 交流活動

加古川市志方町や稲美町下草谷、市川町にて地域住民との交流活動をおこなった。志方町や下草谷では、農業やため池、農地、水利施設などを管理していくうえでのリアルな課題を当事者から聞くフィールドワークや、草刈りや「かいぼり」などの管理作業に参加した（写真4）。市川町では、有機農業を核とした村づくりに関するヒアリングや有機農法について学ぶ機会を設けた。

また、課題を聞くだけでなく、地域でおこなわれるイベントのサポートもおこなった。具体的には、志方東で開催されたコスモス祭り（日時：2023年10月14～22日の土日計4日間、イベント参加人数：のべ1,000人）に参加し、会場設営やサツマイモ掘りのサポート、商品として出品する枝豆の選定・販売などをおこなった。

### 5. 今後の展望

各研究・実践活動は始動したばかりであり、課題は多くある。それらの課題を明確化するとともに一つずつ解決していくことが必要である。これらの活動が、学生にとってのコース選択やゼミ選択、さらには卒業論文のテーマ選定、キャリア選択において、有益な経験となるようにしていきたい。

#### 注釈

注1) 「（一社）ため池みらい研究所」については、環境人間学部の情報サイト「かんなび」を参照されたい。<https://shse-maga.com/study/913>

注2) 「播磨畦師」については、2022年度のエコ・ヒューマン地域連携センター活動・研究報告集を参照されたい。